

---

# イナズマイレブンGO もう1人のシード

佐久間次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イナズマイレブンGO もう一人のシード

### 【NZコード】

N2850V

### 【作者名】

佐久間次郎

### 【あらすじ】

ファイズフセクター・・・それはサッカーの試合の得点、勝敗を支配する組織。

そして、それを見守り、ファイズフセクターに逆らうサッカー部を潰す・・・シード。

雷門の送り込まれたシードは1人・・・しかし、もう1人いた・・・

## もう一人のシード（前書き）

この話は殆どアニメとおりです。

アニメにはない話もありますが。

いくつも、オリジナルキャラを出します。

## もう1人のシード

雷門、入学式。

「今日、雷門に転校してきました里山優理です。」

「私は、フイスフセクターのから送られてきた・・・。」

シード。

女子サッカー部なんか三つも潰したよ。

次は私潰すのではなく、もう1人のシードが潰す。

私は、マネージャーとして裏から潰していくのよ。

先生「じゃあ、霧野と神童の後ろだ。」

2人の後ろの席に座る。

優理「蘭丸くん、拓人くん。私のこと、覚えてる?」

2人「えつー?」

2人は驚き、戸惑いの表情になつてゐる。

優理「優理よ、ほら・・・近くの公園でよく遊んでたじゃない・・・。  
・。」

神童「ハツ・・・優理・・・ちゃん・・・。」

霧野「あの時の優理ちやん!?」

優理「うん、よくサッカーしたよね。周りに友達がいなかつたから。  
・。」

そう、・・・神童拓人と霧野蘭丸と私は・・・幼馴染だつた。

幼馴染といつても・・・お互いの両親も・・・家族も知らない。

言つてみれば、遊び友達つて・・・感じ。

仲が良くてあちこち行つた・・・。

でも、お父さんの仕事の関係で・・・すぐ、引っ越した・・・。

神童「ここでまた会えるなんて・・・運命感じる・・・。」

優理「ふふ、それにしても、蘭丸くんは相変わらず女の子つて感じ。

「

霧野「つ・・・・！それ言つなよーー！」

さて、本題だわ・・・。

優理「私ね、サッカー部のマネージャーやりたいの。」

2人「えつ・・・・！？」

驚きの表情になつてゐる。

優理「だつて、2人とも・・・サッカー部入つてるでしょ？」

神童「う・・・・うん・・・・そうだけど・・・。」

霧野「サッカー部は・・・やめておいた方がいい。」

優理「どうして？」

神童「大変なんだ・・・部員よりはるかに・・・。」

えらい、えらい。止める・・・。でもせがんだらどう断るか・・・。

優理「でもどーしてもーーお願ひつーー頑張るからつーー！」

しばらく黙り、2人は見合させ。

霧野「しょーがないな・・・・・・。」

ああ、承諾しちゃった……。まあ、この程度なら問題ないでしょ。

すると男子生徒が入ってくる。

男子生徒「たつ・・・大変だ！ サッカー部が！ サッカー部が！」

2人「！！」

ふふ、ついに来たわね・・・。

シード。

グランドには、剣城と松風がいた。

それについて行つた優理・・・。

な・・・、まあ・・・同じシードだもの・・・そんなことも・・・ある・・・わよ・・・ね。

そのまま神童率いるファーストチームが

剣城京介率いる黒の騎士団との戦いになつた・・・。

私は、その戦いを見た。

まさか、南沢篤志からの交代が・・・あんなちっぽけな新入生、松風天馬に任せるなんて・・・。

フィスフセクターをなんだと思ってるのかしら。

それに、まさか拓人くんが・・・化身を生み出すなんて・・・ね。

試合後・・・

優理「雷門中のシードが、まさか京介なんてね。」

剣城「学校で気安く呼ぶな。」

優理「…………ちやんと潰してよね、私……マネージャーなんだから。」

剣城「そんなこと言つたために来たのか……『姉さん』。」

そつよ、…………全では…………あの日から…………

友を裏切る…………覚悟でね…………。

## 新入生、神崎聖也

神崎「おい、そこのマネージャーみたいな奴！」

え？私の・・・こと？

振り返つてみた。

優利「私は、マネージャーじゃないわ。これからなるの。それと、私は、山里優利！」

神崎「俺は、神崎聖也。やっぱ、サッカーはいいよな！・・・雷門は、円堂様の母校！－くう－！燃えてきた－！！！」

はあ、なんか面倒な奴・・・。

優利「サッカー部は、やめておいた方がいいわ。」

神崎「なんで？」

優利「今の惨劇見たでしょ？あなたも、ボロボロにされるわ。」

神崎「構わないさ！－ボロボロになつても、戦うのが男つて奴だろ！？俺、入部するぜ！」

優利「あなたに、そんなサッカー技術があると思えないわ。」

すると、神崎はニヤリと笑う。

神崎「ふふふ！見ろや！俺の豪炎寺様を越える・・・

גַּתְהָנֵג

やめへ・・・・・おの口を思へせす・・・・・

優利「じゃあねーー！」

優利は逃げ出すようになつていった。

神崎「・・・?つてえ!!入学式、忘れてたああああああああああああああ!!」

松風「キミも、サッカー部に？」

神崎「ああ！燃えるよな、サッカー！？」

西園「僕も、サッカー部入るんだ！！」

楽しみだぜ・・・・・！

神崎達が部室に向かうと、次々にサッカー部をやめるセカンドチーム。

やめることに反抗した、松風と神崎は罵声を浴びる。神崎「くー！なんなんだよ。あの先輩達ーー！あれでも、雷門サッカー部かよーー？」なんで・・・こんな・・・。どうしてやめるんだ！

そこに・・・

優利「あ、さつきの神崎と松風。やつぱ、来てたんだ。」

へえ、残つたのはファーストチームだけか・・・。

いい感じに潰れしていくわ。

3人「サッカー部に、入部しますーー！」

チツ、邪魔なことを・・・！

優利「拓人くん……。」んな、新人生……雷門の名がすたるん  
じゃないの？」

神童「……もう、ここには来ないでくれ。」

神崎「なんでだよ！？たつた9人しかいないのに！……」

神童「お前に何がわかる！？」

神崎つて奴……なんのよ、先輩に対する礼儀がないの……？

あんな奴、すぐに潰される……！

結局、入部テストで、入部を決めることになった。

放課後

優利「拓人くん、具合……大丈夫？化身を生み出したあと、倒れ  
たから心配したよ？」

神童「ごめん、う……うう……。」

泣き出す神童。

ああ、泣いたやつた。

相変わらず、泣き虫なんだから。

優利は、神童の背中をさする。

神童「優利・・・。」

優利「私が、マネージャーになつて拓くんの力になるね。」

神童「・・・・。」

黙る神童。

優利「あんな新入生なんかサッカー部に入る必要ない・・・。」

優利「京介！！」

剣城「なんだ、姉さんか。」

優利「ファーストチームの9人しか、残らなかつたわ。でも、新入生が入るとがなんとか。」

剣城「松風か・・・そんな奴、簡単に潰せる。俺は、サッカー部に入る！」

優利「まかせたわ。・・・それと私、拓人くんと付き合つことにした。」

・・・。

剣城「・・・はあ？」

優利「親近感を深めて裏からつ・ぶ・す・のー

剣城「ふん・・・。」

夜、呼び出す

優利「ねえ、拓人……。」

神童「何? 優利。」

なんで急に、僕を呼び捨てに……?

優利「私と……付き合ってほしいの……。」

神童「……えつ……。」

動搖する神童。

優利「答えは、すぐに出さなくてもいい。考えて……。」

すると、

神童「わかった、付き合おう。」

え・・・? そんな・・・。こんな・・・早く・・・? なんか・・・。恥ずかしいよ・・・。

付き合いといつても私と拓人の性格上ベタベタするわけでもなく自然に。

それに、私は本気というわけじゃないから、やや~~せ~~いちなかつた。

# 人部テスト、サッカー界の眞実

朝早くから練習する3人。

神崎「俺の必殺技を見せてやろー!!スマッシュファイヤー!!」

跳つたボールが炎をまといぐるぐるとまわる。

西園 - すこい！

松風「これじゃあ、キーパーもどこをとらえたらいいかわからない  
ね。」

よし、次は・・・

# 神崎「ボーリの奪い合いだ！！」

西園「よおし・・・」

しかし簡単に神崎にかわされる。

# 松風一早い！！

神崎「俺は幼稚園のころからサッカーやつててさー！小学生でも優秀な方なんだぜ。自分でいうのもアレだけど。」

松風「負けるもんかああああああああ！」

神崎のボールを奪う松風。

！？・・・・なんだ、・・・・」いつ・・・・・。

サッカーはそこそこなのに・・・なんで・・・

ボールが奪えた。

神崎「次はバス練・・・・・

チラリと時計が見える。

神崎「うわあつ！－やべえ・・・・遅刻だ！－！」

神崎「入部テスト！燃えてきたああああああああ！－！」

松風「がんばろうね、聖也。」

神崎「おうーー氣合と根性と情熱でやるぞ！－！」

西園「天馬、聖也早くしないと遅刻しちゃうよ。」

2人「わわわつと！」

でも・・・放課後にや俺の才能が開花してるぜ。

西園「えいつ……」

神崎「いいバスだぜ……よし、次は天馬……」

神崎からのバスを受ける。

天馬「よつしー。」

水鳥「やつてんじゃん……。」

葵「あつ瀬戸先輩！」

水鳥「水鳥でいいよ。」

葵「水鳥さん……。」

茜「また、神様見れる。」

あ、新入生やつてるやつてる……。

まあ、入部されるのも……手の内だけどね。

優理「そういえば、顧問と監督はどこに？」

茜「あんないします。」

音無「アナタが新しいマネージャーね。」

優理「はい、転校してきました、2年の山里優理です。」

久遠「私がここに監督だ。」

優理「よろしくお願ひします。」

まあ、この2人をよく知つておけば……

裏からでもやりやすい……ってことだわ。

そして、入部テストが始まる。

次々にバスを奪われていく松風と西園達に比べ、神崎は快進撃をしていく。

神崎「よつとーつとー！」

車田「結構やるな。」

フフフン！俺はこんなもんじゃないぜーーー！

バスされ神童からボールを奪おうとするが・・・

神童「つーーー！」

かわされ転ぶ神崎。

神崎「うわっーーー！」

早い、・・・・へつ・・・・さすがキャプテン・・・ってところか・・・。

松風「うおおおおっーーー！サッカー やるんだあーーー！」

神童「無駄だーーー！」

葵「天馬ーーー！」

水鳥「根性見せろ！天馬！！」

茜「神様」

あ、あの・・・隣の人を・・・どうにか・・・して。

**優理「がんばつて、拓人！」**

神童

しかしかわされる。

松風「絶対・・・入部するんだ！」

といふか、いまどき根性つて……。

茜「神様、かつこいい」

水鳥「あのな、茜・・・。」

シードがいようがいないが、このサッカー部そのものが心配ね。  
(汗)

なんだかんだで、俺達、3人合格した。

そして、次は本物の試合！燃えてきたあ――！

優理「拓人！」

神童「優理……。優理は……マネージャーなんだよな……。  
」

優理「うん。」

神童「フイスマネージャーのこと……話すよ。」

ふふ、來た……。

神童「勝敗指示もされて得点まで決まってるんだ……。」

優理「……大変だね……。だから、私にマネージャーやるな  
つて……言ったのね。」

神童「なんか、……ごめん……。」

優理「謝らなくてもいいよ。……サッカー続けるために、フイスマ  
ネージャーの指示に……したがつてればいいから……。」

そうよ、永遠に……ね。

次の日

確か、次の勝敗は3・0に雷門の負け……。

指示通りに・・・がんばってね・・・。

雷門のみなさん・・・。

神崎「楽しみだぜ！」

バスの中うずうずする3人。

松風「先輩達のかっこいい姿・・・みたいなあ。」

残念ね、無様な姿しか・・・見られないわ・・・。

神童「つ・・・！」

あー、怒ってる・・・ってか怒るよね・・・普通・・・うん・・・。

試合が開始される。

先輩達がバスし得点しようつと見せかける。

神崎「せんぱーい！！バス！！」

しかし、無視。

神崎「チツ・・・。1年だつて・・・。」

松風「ハア、ハア・・・。」

神崎「松風！！」

松風「追いつけないや・・・。」

西園「ハア、ハア、・・・ハア・・・。」

それくらいで息切れしてたら、まだまだだな。

神崎「南沢先輩！！バス！！」

南沢「・・・つ。」

バスがきた・・・しかし・・・

相手のボールを奪われる。

もつっ！…あんなみみっちいバスするから…。本気になれよ…。

この時はまだ…。気づかなかつた…。

松風「あれ…？」

神崎「…。なんか変だ…。」

薄々だが気づき始めた。

神崎「わざと…？」

西園「…。あつ…。」

前半終了

松風「どうして…？どうして本気でサッカーやらないんですか！？」

そして3人に告げられたのはフィスフセクターの存在。

すべて…。聞かされた。

神崎「そんなん…。皆が反抗すればいい話じやねえか…！」

バカね…。それができないから…。皆…。

神童「お前に何がわかる！……！」

神童の怒鳴る声。

神童「俺だって……俺達だって……やりたいよ、本気のサッカ  
ー…………でも！……サッカーをやる機会まで失いたくはないん  
だ！！！」

松風「…………」

神崎「だからってなあ！！！」

優理「キャプテンに口答えする一年は退部してもうりつ他ないわね。」

神崎「なつ……転校してきたお前が…………」

神童「黙れ！！！」

神崎「つ……」

そして後半が始まる。

松風「俺達だけでもやるつ。」

神崎「ああ、俺達だけでも得点しようつ。」

西園「うん。」

しかし先輩がうまくパスをしない。

松風「くつ・・・・・。」

神崎「ツチ・・・。おい、キャプテン！バス・・・受け取れえええええ！」

だから先輩に敬語使えって・・・・・。

優理「ありや、人間として問題ありそうだわ・・・・・。」

キャプテンにバスを回し続ける松風と神崎。

そして、神童は遂に、ゴールを入れてしまつ。

1点取り、そのまま後半は終了。

田嶽山 · · · · · · · · · ·

## 日産旗艦会場（横浜）

冒頭は、オリジナルシーンです。

巴堂監督登場

きれいなピアノの音色が聞こえてくる。

なんなんだろ？

とてもきれいな建物。

シャツと神童がカーテンを開ける。

神童「わつ。優理！」

優理「拓人！－」  
「この豪華な家……拓人の家だったの！」

神童「そうだよ、家……入る？」

優理「いいの？ありがとう。」

神童「ハア。」

優理「ため息ばっかり吐いてると幸せなくなるよ・・・ってそういうのないか。この前の栄都学園との試合。」

神童「俺が・・・、ゴールを・・・。」

優理「気にしないでよ悪いのは・・・。」

フイースフセクターに逆らつ、

優理「松風と神崎と西園でしょ。」

神童「だけど・・・。俺のせいで、久遠監督が・・・。」

確かに、あの監督・・・何考えてるのかわからないけど・・・。

危険・・・なのよね。

クビになつて・・・正解、正解。

新しい監督をフイースフセクターが支配する。

それで、それで・・・！

神童「興奮・・・してる?」

優理「あ、ちょっと、ここが豪華だつたから……。」

「こんな言い訳……通じないよね……。」

神童「そつか……。」

とピアノを弾き鳴らす。

あ、・・・通じた？

きれいな音色・・・。

神童「つ・・・！」

ガーン！！

急に美しい音色から乱れた音色に変わった。

優理「拓人・・・？」

神童「つ・・・！つ・・・！」

泣いちゃつた・・・。私がいるのに・・・。

もしかして・・・私が本気じゃなって・・・気づいてるのかな・・・。

だから・・・心が不安定？

俺の得意なサッカー。

神崎「このスピードでも・・・キャプテンには敵わなかつた・・・  
。」

西園「ああっ！！」

するとパツと神崎に奪われる。

松風「あ、『ごめん、ごめん。』

西園「天馬～。」

ボールが西園の方に転がる。

松風「わっ・・・んっ・・・！！」

神崎「松風・・・いや、天馬！バス！！」

サッカーは・・・俺の夢。

いや、俺だけの夢じゃねえ・・・な。

父さんの・・・夢。

かなえてみせるさ。

そして、父さんが楽しんでたあの頃のサッカーを・・・取り戻す。

神崎「やるぞっ！！！天馬ア！伸介ッ！！」

松風・西園「うん！」

すると、

木野「天馬！」

松風「あ、秋姉！！」

ん・・・すごくかわいい人。

木野「あ、部員？」

松風「うん、神崎聖也と西園伸介って言つんだ。」

木野「へえ・・・。そうだ、今日家で夕飯食べていかない？」

三人「えつ・・・！？」

木野「おー」ってあげるわ。」

三人「やつた――――!」

次の日。

朝練。

神童は休み、監督はいない。

みんなの集中がない。

神崎「先輩・・・・なんで、練習しないんですか!?」

南沢「誰のせいだと思つてるんだ?」

速水「そもそも、キヤプテンと監督がいなきや・・・。サッカーなんてやつてられませんよ。」

神崎「だからつて・・・・!」

葵「聖也くん!..」

西園「やめなよ、聖也。」

チツと舌打ちをする。神崎。

ハア、拓人結局来なかつたなあ・・・。

このままこなきや旨のやる気がでない。

サッカー部は廃部でシードの役目は終わりなんだけど・・・。

手ごたえというか・・・なんだ・・・つまらないといつか・・・。

いや、なかなか進まないより進んだ方がいい・・・。

なんで、複雑な気持ちになつてゐんだろう・・・。

水鳥「優理！優理！」

優理「ハツ・・・！何？」

水鳥「さつきから話しかけてるのに・・・やつぱ、神童がないね  
えと・・・。」

優理「そうじやない。手ごたえというか・・・。」

水鳥「てごたえ？」

優理「あつ・・・。なんでもない・・・。」

あつ・・・あぶなつ・・・。

速水「はあ・・・。雷門サツカ一郎は終わりだ・・・！」

「それは違うな。」

そこに現れたのは・・・

全員「！！」

音無「久しづびりです！」

田堂「田堂伊・・・。今田からいりの興替だーー。」

西園「本物だ！」

そして、円堂は練習場所、河川敷と言つ。

しかし、もうフィスフセクターに逆らいたくない旨は練習には来なかつた。

来たのは松風、西園、神崎のみ。

神崎「あつ・・・うつ・・・。あの・・・神のゴールキーパー・・・

円堂守様監督と・・・あああ！！」

円堂「円堂でいい。さて、松風、お前はドリブルが得意だったよな。

「

松風「はい。」

円堂「松風はゴーンでドリブル練習、神崎・・・お前は・・・。」

「キドキドキ・・・心臓の音があ・・・聞こえる・・・。

ハア、ハア、ハア・・・。

円堂「お前は、確か、ボールを奪うのが得意だつたな。」

神崎「は・・・い。」

うわっ・・・俺・・・がちがちだ・・・。

円堂「ボールを奪つてバスにつなげることは、とても大事な役割だ。  
・・・それができないと・・・チームワーク・・・連携というものが  
がとれない・・・とにかく、正確にボールを奪つて正確にバスを  
する・・・。まずは狙つたところにボールを当てることだ。」

神崎「はいっ！…！」

燃えてきた・・・。

田舎が作つた的に当てる。

だがそれが跳ね返り顔面直撃する。

音無「神崎くん、大丈夫？」

神崎「大丈夫です！」

ニッと笑う円堂。

霧野「・・・・・・」

あれ・・・・。蘭丸くん・・・。

優理「先生、ちょっと・・・用事思い出しだしました・・・帰ります。」

音無「え、ええ。気を付けてね。」

優理「蘭丸くん！！」

霧野「優理・・・。」

優理「来てたんだ・・・。」

霧野「・・・神童のところ・・・いかない？」

優理「う、うん。」

あ、・・・ダメ・・・言つちやつた・・・。

神童「うん・・・。」

霧野「神童、元気だせよ。」

優理「ねえ、今日新しい監督が来たの。」

霧野「誰だと思う?」

神童「誰つて・・・。」

霧野「円堂守。」

神童「えつ・・・。」

霧野「それりや、だれでも驚くよな。」

確かに。

というか、私も。

なんで・・・本気のサッカーを指導する監督が・・・。

霧野「練習場所は河川敷。誰も行かないだろうな。新入りは来るだろうけど。」

神童「・・・・・。」

三人の練習の中、

橋の上に霧野と神童と優理が。

近くで南沢以外の部員が見ていた。

円堂「皆、いるんだろ？。」

「！」

円堂「出でこい。」

そつこわれ、出でくれ監。

円堂「一本シユート練習だ。」

神崎「つ・・・！」

円堂監督の前で恥ずかしいマネは・・・。

そして松風以外は皆成功。

そして・・・

円堂「・・・次は剣城、お前だ。」

剣城「・・・！」

全員「！-！-？-？-？」

神童・霧野「！！」

あ・・・あ・・・円堂監督は、京介がシードだと気付いてないの・・・？

それとも、天然・・・？

剣城「デスソード！！！」

剣城が放つた必殺技、デスソードが円堂に向かって一直線。

剣城以外「！！！！」

あああ、やつちやつたよ、京介・・・。

しかしじスツとかわす。

全員「！――！」

神崎「剣城！――てめえ・・・！――円堂監督に・・・！」

あ・・・ダメだ。落ち着け・・・。

神崎「剣城！――」

」のままでは神崎はキレる」とは確実。

剣城「…………」

円堂「よし、今日はこれで終わりだ。明日、サッカー場で待ってる。  
・・。」

変わった監督だな……。いろんな意味で。

優理「ねえ、京介……

剣城「…………！」

うわっ……機嫌悪そう……。当たり前か、うん。

優理「円堂守が監督になるつて知つてた?」

剣城「知るか!」

優理「……フイスフセクターは何を考えてるんだろう……。」



## キャプテンの資格

剣城「だとよ。」

優理「え？ 神童がやめた？」

神童「…………。」

剣城「…………。」

去る神童。

神童「では。」

円堂に退部届を渡す。

神童「俺、退部します。」

一言で去る。剣城。

全然読み込めない・・・。

もつと話を聞きたいけどここ学校だしね・・・。

でも、よく考えたら当然かもしれない・・・。

ゴールを決めた上、キャプテンだから・・・。

でも、納得いかない。ファイスフェクターに逆らったのは・・・松風  
と神崎なのに・・・！

優理「また、家にお邪魔しちゃってごめんね。」

神童「いいよ、別に。付き合いつてるんだから。」

う、心に草ヶサツとくる・・・。

優理「やめるの？」

神童「ああ。」

すると松風が来たということをメイドから知り、入れた。

なんで・・・あんな奴をいれるの？

松風「なんで・・・どうしてやめるんですかー？キヤブテン！？」

神童「俺はもう、キヤブテンじゃないー！」

そうして、松風と神童は言い争いになる。

神童「帰れ！ー！」

松風「・・・わかりました、生意気言つてすみません・・・あの、  
・・・俺・・・見たいんですね！－キヤブテンのフォルテシモが！！」

神童「帰れ！ー！」

松風「帰りません！ー！」

そして、遂に松風の熱意に打たれ、見せることに。

神童「フォルテシモ！ー！」

西園「わあ、本物だ！」

神崎「やっぱ、雷門サッカー部員が放つ、必殺技は一味違つたなあ・・・。  
」

そして去ろうとする神童。

松風「あの、いつか・・・本当のサッカーできるようになつたら・・・  
・戻つてくれますよね！？」

松風のデリカシーのなさにキレる神童。

そして松風からボールを奪う。

神童「俺をぬいてみろ！――！」

神崎「それならう・・・――！」

西園「ダメだよ、ここは天馬が・・・。」

神崎「じゃあ、俺はなんのために来たんだよ！？」

松風「絶対、抜かして見せます。」

しかし、神童のスピードにボールをキープするのが精いっぱいだつた。

だが・・・

松風「そよ風ステップ！！」

必殺技で神童を抜き去った。

松風「やつた・・・。」

神童「必殺技・・・。」

神崎「やつたな！天馬！」

次の日。

天馬のこと少し心を入れ替えた神童。

そこへ・・・

剣城「やめたんじゃなかつたのか？」

神童「お前には、関係ないだろ。」

剣城「次のホーリーロード・・・。一回戦目、2-0で雷門の負け  
だ。」

神童「！..」

去っていく剣城。

## 神崎に秘められた過去、欺き

部活が終わり、家に入る。

神崎「だだいま・・・・つて誰もいないか。」

テーブルの紙切れがあつた。

今日も温めて食べてね

ああ、朝の残りか・・・。

母さんは仕事に出かけてほとんどあつたことがない。

俺は一人っ子。

だから家には誰もいない。

俺は昔からサッカーが大好きだった。

お父さんは昔、サッカー部の監督をしていた。

その頃は俺の大好きなイナズマジャパンがまだまだ弱小チームだった。

でも、だんだんと強くなつていった・・・。

父さんもよく、雷門と試合したつて・・・言つてたな・・・。

神崎「父さん・・・。」

父さんは自分達のチームをフットボールフロンティアで優勝させた  
いつて言つていた・・・。

・・・けど・・・

キイイイイイイン

ドオン！！

ビー ポー ビー ポー

俺の父さんはサッカーの練習の帰り・・・俺を庇い事故にあった・・・

「う・・・あ・・・父さ・・・うわああああああああつ！――！」

だから・・・・・決めたんだ・・・・・！

俺は絶対ホーリーロードで優勝するって・・・・・！

「本気」のサッカーで！！！

父さんが言っていた・・・昔のサッカーで！！！

神崎「何が・・・何がフイースフセクターだ！！！熱いサッカー奪つて・・・・何が・・・何がしたいんだつ！！！」

誰にいうわけでもなく叫んだ。

神崎「ハア、ハア、ハア……。」

ピーンポーン

神崎「わっあ……。はい。」

力チャツとドアを開けると……。

神崎「三国先輩……！」

三国「忘れものだぞ。」

わっ・・・バイク忘れてた。

神崎「わっ・・・。ありがとうございます。」

三国「……親、来てないのか?」

神崎「はい、俺は母子家庭で……。」

三国「そつか……。もう食べたか?」

神崎「はい、一応。」

三国「じやあな。」

ハア、叫んでたの氣づかれないと良かつた……。

皆、やりたいんだよな・・・。本気のサッカー・・・。

神崎「その点、剣城つて奴は・・・！－！」

マネージャーだって誰が本気出す」とを望んでるみな・・・

神崎「誰でもいいから心情を聞くか・・・・・そういえば、優理先輩の家つてどこだろう。」

一  
方

神童「本当に泊まるの？」

優理「ごめん、迷惑だつた？」

「神童」いや、いいよ。

朝っぱらから京介の機嫌悪いからもお・・・。

といづか、毎日だと思ひ。・・・うん。

神童「あのさ、今度・・・優理の家に行つてもいい?」

優理「はつ・・・! ? だつ・・・ダメよ。汚いし・・・。それに、ほんとなんにもないし・・・。」

神童「それでもいいよ、行きたい。」

優理「ダメつ・・・! ? 「

わっ・・・声が上<sup>フ</sup>づつた・・・。

神童「あ・・・ごめん・・・。」

優理「あ・・・いや・・・ごめん・・・。」

ああ・・・ダメ・・・。びりすれば・・・。

神童「あ、夕食の時間だ・・・。」

優理「気分変えよつね・・・。」

欺くはずが、逆になつちやつうなんて・・・。

次の日

神崎「だあああー！なんでホーリーロードが近づいてるのになんで練習しないんですかあああー！」

全員「・・・・・。」

松風「・・・先輩・・・・。」

優理「仕方ないでしょ、ホーリーロード一回戦は、2-0で雷門の負けなんだから。」

円堂「！」

拓人達がやつてることは正しい・・・。けど。

西園「僕は勝ちたいです！」

松風「俺も勝ちたいですー！」

神崎「なんで、マネージャーが口出すんだよーーー！」

神童「神崎ーー！」

なんでつて・・・。

神崎「何負ける的なこと言つてんだよーーー本気のサッカー・・・見

たくないのか！？」「

神童「神崎！…………優理は…………俺達の本気でやりたいけどや  
れない気持ちをよくわかってる…………それを踏みにじるようなお  
前は・・最低だ！！！」

神崎「えっ・・・・・？」

欺けた・・・といふこと・・・ね。

なんで・・・・なんで俺が怒られなきゃいけないんだよ・・・。

どうして・・・！？

## ホーリーロード開幕

練習をする、松風と西園と神崎。

あらり、やつてゐ……。

優利「拓人はファイズフセクターの指示に従うの？」

神童「わからない……。俺は、本気でサッカーやりたいけど……。  
皆が……。」

優利「・・・・・。」

は・・・?

わ、私・・・欺けなかつたの・・・。

そういうば、私・・・シードらしこと全くやつてないよね・・・?

そして、遂にホーリーロードが開幕する。

でもたつた3人じや勝つことなんか出来ない・・・。それが・・・  
雷門の運命

試合早々、全く、本気を出さない1年以外の部員。

ボーリを持つ神崎が囮まれる。

神崎一チツ・・・！信助！ヘテイングを頼む！！」

## 高いバスを渡す。

國語 卷之二十一

シャンプするが・・・

西園 - うわあ！！

天河川中のテアフレーにより転がる。

「おしゃべり本ですかよ？」

神崎一ぐ・・・！信助・・・・・わああ！！

邪魔だ！！

吹き飛ぶ神崎。

松風 聖也！！！・・・行かせない！！！」

## 追い掛ける松風。

しかし、ついていけない。

松風「う・・・！」

神崎「俺に任せろ！！」

木三十九死列口川を奪ひての祁

悪しね。・・・！」「ル・・・洪めをせでやらへよ。」

俺は  
・  
・  
・  
負けるわけには  
・  
・  
・  
・

初戦で・・・！

ボーリを奪う神崎。

浜野「あつや、じつても本仮。」

倉間「チツ、本気かよ。一年・・・。」

速水「ひええ・・・。」

車田「本気だしたところでかなうわけがない。」

天城「奴らのラフプレーのすごいぞ。」

南沢「あいつら、ボロボロにされるんじゃないの？」

霧野「神童は・・・？」

とかなんとか先輩達がやつてる間に・・・

神崎「うおおおおーー！」

松風「聖也！バス！！」

松風がバスを渡すが・・・

ボールを奪われる。

神崎「すまない！天馬！！」

西園「先輩！！」

しかし、動かない先輩達。

遂に、ゴール手前までくる。

松風「ダメだ・・・！」

しかし、

神童「はああああああ！－！－！－！天馬！－！－！」

バスをする神童。

3人「キャプテン！－！－！」

「な、なんだと・・・！？」

剣城「チツ・・・。」

優利「ありやりや・・・。私の忠告も聞かないで・・・。目に  
ものを味わうだろうに・・・。」

剣城「神童を欺くんじゃなかつたのか？」

優利「仕方ないでしょ・・・。1年の存在は大きい・・・。  
「

とかなんとかしている間に・・・

神童「フォルテシモ！――！」

鮮やかにゴールを決める。

神崎「本気になってくれたんですね？」

神童「ああ、昨日はすまない・・・。」

松風「キャプテンがいれば、百人力です！！」

しかしあとからラフプレーで巻き返される。

そしてゴールの前にくる。

神童「く・・・！」

「まだ、諦めないのか・・・。そういえばお前、シードでもないのに化身が使えるだつたよな。・・・見せてやるよ・・・シードが使う・・・本物の化身を！――！」

そして生み出される・・・

「鳥人ファルコ！――！」

神童「化身・・・！――！」

「ファルコ・ウイング！――！」

神童はまだ化身をコントロールできず

化身の必殺技が迫る。

ドォン！

3人「キャプテン！」

神童は吹き飛ばれ、ゴールを守った三國は、ボールの直撃を浴び、同点になる。

霧野「大丈夫か？神童。」

「化身もコントロールできない奴がファースフセクターに歯向かうなんてな。」

「もういいだろ？ 前半終了だ。」

円堂の言葉を受け、後半が始まる。

しかし、ラフプレーとまわりが本気を出さないのに苦戦する4人。

神童「松風！！」

松風「はい！・・・聖也！」

いいパス回しだつたが・・・

神崎「くう・・・！」

足を引っ掛けようラフプレーでボールを奪われる。

そして、ゴールに近づく。

「終わりだ！！」

しかし、

ボールを受けとめる三国。

4人「！！」

三国「おまえら・・・頑張ってるんだな・・・。ゴールは任せろ！」

点は入れさせない！……」

4人「はい！」

ゴールに向かっていくが……。

西園「わあ！」

再び「」からゴールに近づく。

「鳥人ファル！」

化身が生み出される。

「ファルコ・ウイニング！」

化身シユートを体で止める神崎。

神崎「うおおおお……！」

化身が生み出される。

神崎「精靈フェアリー！」

しかし、化身をコントロールできず吹き飛ぶ。

神崎「わあー！」

神童「化身シユートは俺が止める！…！」

神童も化身を生み出す。

しかし・・・

化身は敗れる。

神童「うわあ！…！…！…！…！…！…やつぱり、化身シユートは止められないのか・・・。」

ゴールに迫る化身シユート。

三国「いや、確かに化身シユートの力は弱まつた！」

三国「バーニングキャッチ！…！…！」

化身シユートは止められた。

「何・・・！？」

三国「松風！…！」

ボールが渡される。

そして、攻めていく、

松風「キャプテン！…！」

神童にパスを回す。

神童「神のタクト！！」

神のタクトで道筋を作りパスを回していく。

三国「今のお前なら化身を使いこなせるはずだ！」

神童「頼む！！お前の力が必要だ！！奏者マコストローマコ！」

そして化身シユートを放つ。

神童「ハーモニクス！！！」

化身シユートにより2-1で雷門が勝利する。

円堂「よくやつたぞ！皆！」

剣城「チッ。」

優利「やつちやた、怒られるのは私達なの。」

## 兄と弟

しばらく剣城の欠席が続く。

クラスからもシードとしての配慮もあり、とくに氣にも止められることはなかった。

むしろ、気にしてはならなかつた。

サッカー部はホーリーロードでの得点でファイフスセクターに知られてはいるもののなんらの動きはない。

円堂もやめさせられるまではいかなかつた。

## 部活動

巴堂「出席をとるが。」

神童「・・・・・剣城・・・・・。」

速水「妙ですねえ、ホーリーロードでは得点したのに、ファイフスセクターからなんの動きがないだなんて・・・。」

倉間「潰すための計画でも立ててるんじゃないの?」

速水「ひやあ・・・・・。」

神崎「ヒーにかくつ・・・・・のすきに練習、練習・・・ですよね、監督様」

巴堂「監督でいい・・・・・。それじゃあ皆・・・・・。」

ゾロゾロ・・・・・

神崎「ツチ・・・・・。」

皆は練習することなくただ遠ざかる。

神童「皆・・・・・。」

松風「キャプテン!-!」

神童「・・・・・5人でもやるが!-!」

松風・西園・神崎「はい!-!」

／＼

音楽が流れる。

優理「あ・・・・・。」

音無「校内は携帯禁止よ。」

優理「すいません・・・。出でていまわ。」

正門の前で携帯を開く。

ああ、黒木さんじやなくて良かつた。

優理「もしもし?」

剣城「おい、なんでお出ないんだよ!?」

優理「なんでつて・・・。学校だもの・・・仕方ないでしょ。」

剣城「今日は俺が兄さんの見舞いに行くから。」

「

優理「5日間連続なんだけど・・・。」

剣城「黙れ、マネージャー。」

プリン。

切れたらしい。

優理「なあに、この姉と兄との態度の差は。」

「

）

）

優理「げえつ！…今度は黒木さんつ・・・！」

出た。

優理「もしもし・・・ええ、はい・・・すぐに向かいます・・・。」

はあ、面倒だな・・・。

ここはフィフスセクターの本部・・・なんだろ？・・・1番えらい人がいるところ（笑）

あそこにいるイケメンは・・・イシドシユウジ・・・なんだ・・・1番えらいというか・・ゲーム的に言えば・・フィフスセクターのボスっていうか。

イシド「さて、君の女シードとしての~1の座は守り続けたい・・・そりでしょ!。」

優理「・・・はい。」

イシド「・・・もつと・・・そりだね・・・派手に立つてく  
れないうか?」

え・・・?

優理「あ、あの・・・お言葉ですが・・・どいついう意味で・・・?」

イシド「・・・。わからないのか・・・。雷門のつまらないマネ  
ージャーなどやめ、弟のように他のチームに所属するところのは・・・  
。」

な、何わけのわかんないこと・・・。

最初に「マネージャーとして翻弄しかつて言つたのはアンタじゃない。

優理「そんなつ・・・!弟は・・・最近・・・不調なんです・・・  
!・・・そんな弟を見る事ができるのは姉である私です。・・・  
確かに派手ではないですが・・・弟のサポートをしていきたいの  
です・・・!」

イシド「・・・。悪かつたよ、君の弟を思つ気持ちを利  
用して・・・。」

な、なんのよあいつ!・・・!

優理「あれで本当に優一兄さんの手術代を払ってくれるかしら・・・」

とぼとぼと病院へ。

京介に怒られるだろーけど。

優一兄さんの顔最近みてないしな・・・。

といつか意外とマネージャーの仕事つて大変なんだよね・・・。

ガラツ

優一「あ、董！」

そうそう、本名は剣城董・・・。

優理つて名は昔人見知りが激しかったからわざと偽名使って拓人達に名乗つたんだ・・・。

剣城「姉さん・・・なんで来たんだよ・・・つ・・・！」

やや怒つてる・・・。

もつ・・・・・。本当に優一兄さんとあたしとで態度が違うんだからつ・・・・・！

優一「元気そうだね。」

董「うん、・・・といふかそれはこいつのセリフだよ。」

ああ・・・なんで優一兄さんと京介でこんなにも性格違うのかな・・・。

剣城「・・・チツ・・・・・。」

ちよつ・・・舌打ちした！？

剣城「兄さん、俺・・・もう帰る・・・。」

優一「うん、またね。」

最後にあたしをにらみつけて去って行った・・・。

ハア、ほんと・・・なんで・・・こんな性格違うのー・？

優一「・・・最近来れてないね、小6までは毎日來てたのに。」

董「う・・・うん。」

優一「マネージャーの仕事が忙しいんだね。」

董「意外と部員よりも・・・。」

蘭丸ぐんと同じこと言つてゐる・・・。

優一「へえ・・・。」

長いこと話した。

時間つて残酷で・・・

あがめてこゝのは早い……。

あの口だつてそつだつた……。

あの時……あたしが……ちゃんと……京介を見ていれば……

次の日

剣城「次の試合に俺を出してくだせ。」

南沢「俺、退部します。」

この言葉が俺達の心に響いた。

円堂監督はそのどつちも引き入れた。

神童「本当の勝利を目指すんじゃないんですか！？」

退部は仕方ないとして、なんで……シードを……あんな奴を……

・試合なんかにつ・・・！――

神崎「なんであんな奴を試合に入れるんだよー…？」

優理「・・・・・・・・・。」

南沢先輩がやめたからしかないでしょ。

円堂「本当勝利を目指すこそだからだーー！」

こそだから・・・意味が・・・意味が分からないつ・・・。

俺はあんな奴と・・・

神崎「だったら俺、次の試合はベンチにいます。」

全員「ーー！」

そのまま去つていいく神崎。

神童「神崎つ！…！」

その日の夜。

天馬が珍しくふさぎ込んでた。

神崎「よ、天馬。どうしたんだよ。」

松風「…これで本当にいい…のかな。」

神崎「だよなあ。」

松風「剣城のことじゃない。」

神崎「えつ？」

松風「ファイフスセクターに逆らう事。」

神崎「何言つてんだよ…いいんだよ…！」

すると状況を察した信助が・・・。

西園「聖也が去った後、先輩達に責められたんだ・・・。サツカ一部を潰しているのは天馬だつて・・・。」

神崎「なんでつ・・・! 悪いのは・・・剣城とファイフスセクターじゃねえか! ! ! !」

西園「僕に言われても・・・。」

ゆるさねえ・・・ファイフスセクター・・・・・。

先生「今日は席替えあるかい。」

えつ・・・。

じゃあ蘭丸くんと拓人と離れちゃうの?

シードだから下手に他人と接触したくないのに・・・。

くじを引いた。

あ・・・5番・・・

隣の席・・・6番だよね・・・だれだろ・・・。

速水「あー・・・5番の人いますかあ？」

優理「速水くん！！」

速水「あ、山里さん・・・。」

優理「私、5番だよ、よろしくね。」

速水「・・・はい、よろしくお願ひします・・・。フウ・・・良かつた。」

優理「どうして？」

速水「話したことない人の隣だと気まずいじゃないですか。」

わかる・・・わかるよつ・・・！」

優理「私も・・・。マネージャーだと放課後も削っちゃうからあんまりサッカー部以外の人と話したことないのよ。」

まあ・・・確かに・・・話しやすい人がいいけど・・・

後ろに拓人、蘭丸くん、横に速水くん、前に倉間くん、浜野くんつて・・・

サッカー部に囮まれすぎ！――！

視線が痛い・・・。

優理「わあっ・・・皆サッカー部だね。」

速水くんはホッとしてるけど・・・

怖い・・・バレそう・・・。

霧野「良かつたなあ、サッカー部ばっかりじやん。なあ、神童。」

拓人と蘭丸はまた隣か・・・。

神童「ああ、優理・・・。」

ニコッと笑った。

ちゅうっつ・・・・やつ・・・

倉間「なんだ？最近、2人でいるとこよく見るけど……」

浜野「付き合つてゐる系？」

優理「つ・・・・・あ・・・・。」

神童「お前達には関係ないだろ？」

浜野「顔真つ赤！！」

霧野「へえ・・・・。まあ、キャプテンとマネージャーが付き合つてよくあるよねえ。」

神童「・・・・！」

ハア・・・・違う意味でも大変そつ・・・。

ホーリーロード2回戦日が近づいてきた・・・。

よおし。

次の日

優理「ねえ、皆は・・・2回戦日で本気だすの?」

浜野「え・・・・あ・・・・。」

速水「出せるわけないじゃないですか・・・・。」

倉間「そんな」としたら、サッカー部は潰されるよ。」

霧野「だよなあ・・・・。」

すると皆の視線が神童に集まる。

神童「俺は・・・・俺はつつ――絶対勝利するつ――!」

優理「どうしてつ――サッカー部が潰れひやうんだよ――?」

神童「ありがと、・・・俺のために・・・。だけど・・・俺はつ・・・・! 勝利を手出す! -!」

ビリビリ・・・・!

ビリして松風の・・・・神崎の・・・・なんで乗るの-?・?

優理「絶対・・・・絶対後悔するよつ-! -!」

私のその後飛び出してしまった・・・。

シードになつて後悔してるのは・・・・本当は私・・・・。

それが痛いほど身に染みてくるが・・・・・

優一「フフ、仲が良いね。」

剣城「よくなんかねーよ。」

董「ハア……。」

優一「そういえば、最近本当に早くへるね、サッカー部はいいの?。」

剣城「あ、ああ。」

董「最近忙しかったからすぐ終わつたの……。」

苦しい言い訳……。

優一「サボり?」

剣城「つ……違うよ、兄さん。」

痛い……いろんなことが……。

普通……普通の学園生活送りたかつたよお……。

優一「董……つー?」

剣城「姉さんつー!ー!」

あ……泣いちゃつた……。

董「優一兄さん、『めんなさい』……。」

逃げるよつて病室を出た。

## 京介の出ていく。

優一「董・・・京介・・・・・。」

剣城「姉さんっーー何やつてんだよーー？」

董「」、・・・「」めん・・・京介・・・・。」

剣城「つたく！！バレたら絶対承知しねえ・・・！」

董「私・・・後悔してる・・・。」

劍城「……！」

董「シーデになつた」と。・・・。「

剣城「なら、やめちまえよ！――兄さんに怪我させたのは俺なんだ

からつ……」「

董「違うよつ……私が……私が悪いの……つ……あの時……私が京介を助けてたら……あの時……木にボールを引っかけてなかつたら……！」

剣城「本当に怪我を負わせた奴の気持ちなんかわからねえお前に言われたくねえよ……！」

董「京介つ……！」

そして……ホーリーロード2回戦目が開幕。

京介が……試合に出る。

つて・・・神崎来てんじやん！――！

水鳥「なんだ、来てんじやん。」

神崎「ふん、剣城が余計なことしないよーにな。」

なら、試合だろよ。

で・・・

ペペーツ

はい、始まりました。

剣城「・・・。」

全員「…………？」

神崎「あ・・・・・。」

つておおおおおおおい！！！

いきなり、剣城オンゴールしゃがつたっ！？

神崎「剣城めえつ…………！」

この先の展開が……全く読めない…………。

VS万能坂中！—雷門の覚醒の訪れ

神崎「くつ・・・、剣城の奴・・・いきなりオングールを決めやがつて・・・。」

水鳥「横で！」ちや！」ちや「うんなら、出ればいいだろ。」

神崎「出れるかよ！？」

あんな、あんな奴と一緒になんかやつたり・・・。

本気でできるわけねえだろ・・・・・。

松風「キャブテンー！つ・・・わあああつ！－！－！」

次々に、万能坂中のラフプレーによって倒れていく。雷門イレブン。

私も・・・シーデとして動いていたことはあるけど・・・

こんなにひどいラフプレーなんて見たいことない。

優理「男はやばんでいやね・・・。」

神童「うわあっ！！」

松風「キャプテンっ！..」

無理矢理、転ばされた神童。」

茜「シン様っ！..」

西園「僕だつて・・・・、僕だつてええええええええ・・・・」

「邪魔だつ・・・！」

蹴り飛ばされる。

西園「うわあつ・・・」

松風「信助エツ・・・」

水鳥「つ！・・あれは反則じえねえのかよつ！？」

神崎「無駄ですよ、先輩。・・・審判が反則の瞬間をとらえられなければ・・・反則にはなりませんから。」

葵「しかも、他の選手がその瞬間を隠している・・・・」

水鳥「チツ、あいつら・・・潰しのプロか！？」

もう時間がねえな・・・・。

松風「ハア、ハア……。俺は……まだ……あきらめない……。つ！」

「いい加減諦めな、お前じや勝てない！」

松風「俺は・・・・・絶対・・・・・絶対・・・・・つ――勝つて見せる――――」

が  
つ  
！  
！

足を引っかけられ転ぶ。

神崎「見てられるか！！」

水鳥「神崎つ……お前がでれば……もう少し……変わったんじやねえのかよ……?」

神崎「わかつてますよ！！！俺だつて・・・・後悔してますからつ！！！俺だつて・・・戦いたいっ！！天馬みたいに・・・・つ！！

涙がポタッとズボンに落ちる。

神崎「天馬アアアアアアアアツ！！！根性だあああああああつ！！！」  
「！」

松風「うんっ！！！」

剣城「・・・まだ懲りてないのか・・・。」

松風「剣城・・・俺は・・・あきらめない・・・。」

剣城「・・・なら、味あわせて・・・やるよっ！――！」

ドオン！――！

松風「うわあっ！――！」

ボールが直撃される。

神崎「天馬つ……！」

静まり返るグラウンド。

松風「俺は……あきらめない……。」

「……仕方ないな。」

ボールを渡す。

「止められかな……俺達の……プレーを。」

松風「……やつてやるつ……！」

天馬は相手ゴールに突き進む……。

すると横から・・・

ドンッ

松風「わっ・・・わわわっ！-！」

ボールを奪う・・・いや、無理矢理、足を狙った。

神童「天馬っ！-！」

松風「大丈夫でーす！-！」

剣城「（あいつら・・・まさかっ！-！）」

「終わりだつ！-！」

ドオン！――

優理「…………」

この時……一体何が起きたのか……私にもわからなかつた……  
。

わかっていること……それは……

京介と……万能坂の奴等が口論になつてゐること……

剣城「一生サッカーできなければいい……！？本気でそう思つて  
いるのか！？！？」

劍城「デスソード！！！」

神崎「え・・・・?」

神童「剣城が・・・・・ゴールを・・・・・。」

前半終了

私は無理矢理、京介を連れ出した。

剣城「なんだよ？」

優理「なんでゴールなんか・・・。」

剣城「万能坂の奴等が言つたんだよ！・・・。松風が・・・。一生サツカーできなければいいって・・・。」

優理「・・・あんたはそれでキレたの・・・。」

剣城「あんな奴等の腐つたサツカーなんか見たくもない。・・・だから・・・万能坂なんか俺が潰す。」

優理「・・・それで・・・いいの？」

剣城「ああ。」

優理「優一兄さんの・・・手術費・・・。」

剣城「・・・っ！！！！！それはっ・・・それとこれとは関係ないっ！！それはでいいんだよっ！！！」

優理「矛盾してる。」

剣城「後半が始まる・・・。」

そのまま逃げて行つた。

私は誓つた・・・。

シードをやめ、眞実を伝える・・・。

私がシードであり、剣城京介の姉であることを・・・。

雷門覚醒！！反乱サッカーの始まり！！！

後半が始まる。

円堂「霧野は怪我か・・・。」

神崎「監督！－！いまさら、情けないですけど・・・俺を試合に出してもらえないでください！」

円堂「もちろんだ！－！」

二ッと神崎にむけて笑う。

神崎「・・・わあ・・・・！ありがとうございます！－！円堂監督様つ－！」

神崎が入り一応、6人で挑むことになる。

万能坂がボールを先制してくる。

神童「ディフェンスに入れ！！」

松風・西園・神崎「はい！！」

前に出る神崎。

「やつを出でなかつたやかましい奴か。」

神崎「ボールを奪うのは・・・俺の役目だ！！！」

ぶつかり合つた。

「...」...神崎は、おまかせの言葉を口にした。

背中に黒いものがつづまく。

「……………あれは……………」

優理「化身・・・！？」

そういえば、神崎くん、一度・・・化身を出したことがあつたけ・・・  
・？

回想

神崎「聖靈フェアリー！－！」

終了

「ううん、おまえがおまえのやうにやるんだよ。」

いける・・・！化身が・・・出せる。

神崎「聖靈・・・・聖靈フェアリーイイイイツーーーー」

化身で吹つ飛ばす。

「何つ・・・！？」

ଶ୍ରୀ କମଳାନାଥ

スライディングでボールが奪われた。

神崎「させるかあーーー！」

ドオン！！！

体当たりでボールが転がる。

神童「ボールを取らせるなっ！！」

松風「でも・・・！ボールが遠い・・・・つ！－」

もうダメか・・・と思われた時。

劍城

そのボールを取つたは剣城。

そのままゴールに向かっていく。

神崎「劍城・・・・！」

あつという間にゴール手前まで来た。

だが  
・  
・  
・

優理「京介・・・！取り囲まれてる・・・！」

神崎「あのままじゃ、いつかボールを奪われる・・・つー！」

剣城「チツ・・・！」

「ファイフスセクターを裏切ったことを後悔しなーー！」

剣城もボールを奪われないようキープしていた。

神童「剣城！！勝ちたいのは同じなら、俺にボールをパスしろ！」

松風「剣城！！」

あつ・・・・！こいつら・・・本気で剣城を・・・ファフスセクター  
を・・・信じるつもりなのか・・・！？

神崎「キャプテン・・・！…どうして！？」

神童「・・・・・。剣城！！！」

「さあ・・・終わりだ！！」

すると剣城は体制をたてかえ、神童にパスした。

剣城「勘違いするな、まだ……仲間になつたわけじゃない。」

神童「わかってる……！」

「フフフフ……ハハハハハはつ……！」

化身が生み出される。

神童「いけつ……奏者マエストロ……！」

化身同士のぶつかり合い。

神崎「うおおおおおおお……聖靈フュアリー……！」

神崎も化身を生み出す。

しかし、・・・

ドオン……

神童と神崎は吹き飛ばされる。

神崎「うべつ……！」

神崎「うわっ……！」

松風「キャプテン！！」

西園「聖也！！」

ゴールに向かつて一直線。

三国「バーニングキャッチ！！！」

なんとか止められた。

「つおおおおおつ！！」

動かない5人、マークされる5人。

ボールが雨のように迫つてくる。

水鳥「なんで・・・なんでみんな・・・」

葵「いろんなの、見てられないです！？」

優理「・・・・・。」

拓人や京介・・・反乱組はマークされてる・・・。

仮にマークを破つても、それまでにもつかどうか・・・。

水鳥「お前ら！――これを見てなんにも思わないのかよ！――？？」

車田・浜野・速水・倉間・天城「・・・！」

水鳥「皆・・・必死になつて戦つてるのに・・・――お前らはこれまで何にも感じないのかよ！――！」

叱咤をかける水鳥。

優理「水鳥ちゃん・・・・。」

遂に、化身を生み出した。

剣城、神童がマークを破つたが間に合わない。

間に合づとしたら、後ろにいる車田・倉間・速水・浜野・天城。

もう本当にダメだ・・・。そう思つた瞬間！

車田「うおおおおおおお！…ダッシュトレイン！…しゅぱおおおおおおおおお！」

まるで機関車のようにな、走り、ボールを奪い取つた。

松風「すごい！…」れが・・・。車田先輩の必殺技・・・！」

浜野「あつちやー、やつちやつたかあ・・・。仕方ないか!」

と乗る浜野。

天城「やるドオ!—!—!」

と天城も乗った。

速水「・・・え?皆・・・?わわわわっ!—!—!—!」

流されたように乗る速水。

次に、浜野にバスがまわった。

浜野「波乗りピエロ!—!—!」

ボールの上に乗ると、水が浮きだす。

相手はしばらくボールが奪えない。

しかし、ゴール手前で奪われ、相手ゴールに近づかれる。

天城「ビバ!万里の長城!—!—!」

すると大きな壁とともに地面が盛り上がり、先に進ませない。

「何つ・・・！？」

松風「すごい！！先輩達すごいです！！！」

バスをドンドンまわしたが・・・ボールが転がる。

その先には・・・

倉間「・・・・・。」

倉間の足元にボールがあつた。

しかし動かない。

剣城「こっちはだ！！！」

バスにも応じない。

車田・三国・神童「倉間！-！-！」

「もうりつたあ！-！-！」

スライディングしようとした時・・・

大きく空を舞うボール。

剣城にパスを回し、ゴールについた。

GKも化身を生み出し、化身対決となる。

剣城「ロスト・エンジェル！！！」

「ガーディアン・シールド！！！」

ドオオオオン！！！

ボールがぶつかり、貫くか、弾くかの戦いになる。

優理「・・・京介・・・・。」

負けないで・・・！頑張つて・・・・つ！！

得点したのは剣城そしてそのままの勢いで神童にバスがまわり、疲

労したGKは化身を生み出せずフォルテシモが貫き・・・

そのまま後半が終了・・・勝利した。

円堂「よくやつたぞ！…皆…！」

次の日

京介以外は練習に参加してた・・・。

さて、そろそろ。

優理「あの・・・皆に大切な話があるんです。」

神童「どうしたの? 優理・・・?」

優理「あのね・・・私は実はシードなの・・・それで・・・本名は剣城董で、剣城京介の姉なの・・・。」

「ええええええー————つ————!」（円堂以外）

## シードの打ち明け

神童「嘘……だよね……？剣城の姉って……シードって……」

声が震える神童。

ああ、私は拓人も傷つけた……。

後悔したって遅い。

董「私は剣城董として、雷門から去ります。」

円堂「ダメだ。」

全員「！」

円堂「よくシードだつていえたな！！待つてたぞ！！！」

音無「ええっ！？・・・か、監督・・・知つてたんですか…？」

笑顔で董を見る。

円堂「サッカーで皆を傷つけたら、サッカーで誇りを取り戻せ！  
！…」

董「私に・・・そんな資格ないです・・・・・。」

円堂「サッカーをやるのに、資格なんかない！！！サッカーで嫌な思い出だけを残してほしくないんだ。」

董「嫌な・・・・・思い出・・・・・イヤナキオク・・・・・。」

過去の記憶が再生する。

回想

董「あ・・・ボールが・・・。」

董がボールを木にひっかける。

京介「とつてくるね。」

董「私が！！」

2人が木に登る。

優一「危ないぞ！2人とも！－！」

私が無意識に木に登るのに邪魔な京介を払ってしまった。

その時・・・！

京介「うわあ！－！」

董「京介っ！？」

木から落ちる京介。

走つてくるお兄ちゃん・・・。

全てが・・・スローみたいに・・・。

ドォン!!

優一「う・・・うつ・・・。」

董・京介「お兄ちゃん!?」

京介の下敷きになった。

私のせいで・・・。

足が・・・

アシガ

動かなくなつた。

終了

神童「優利！？」

董「いやあああああつ！…！私につ…！私にいい！…！サッカーを……やる資格なんかああああああああい！…！」

神童「どう……したの……？」

神崎「……そうだ。」

董「…！」

神崎「お前にサッカーをやる資格なんかない！！」

神童「神崎は黙つてろ！――！」

霧野「落ち着いて、董・・・。」

董「いや・・・あ・・・い・・ち兄さん・・。」

ふわっと私を包み込む何か・・・

神童「落ち着いて・・・董・・・・。」

董拓人

私の意識が途絶える。

目が覚めると、保健室ではなく、マネージャー席に寝かされていた。

董「私・・・。」

神童「董・・・。」

董「拓人・・・、こんな私を・・・名前で呼んでくれるの・・・？」

神童「ひとつ、聞いていい・・・？・・・俺への気持ちは本当？」

董「うん……。」

次は、円堂監督が私の顔のそぐ。

円堂「皆の結論は」「うだーーー！」

松風「董先輩は悪い」となんかしてませんよーーーやめないとぐださい！」

西園「董先輩はかかせないマネージャーですーーー！」

霧野「董はーーー大切なーーー存在だ。」

速水「まあーーーシードだつたんですねーーーこれとこつともーーー助けてくれますよね？」

倉間「シードとしての実力が本当なら、協力してくれたら考える。」

浜野「ちゅーか、仲間は多い方がいい！」

車田「巴堂監督の言つとおり！サッカー部のマネージャーとして協力してくれ！！」

天城「化身の出し方教えてほしいんだ！」

三国「俺は見捨てない！..」

水鳥「苦しんでる奴ほど強くなれるもんや！..」

茜「ずっと友達だよ。」

葵「やめないでください、董先輩。」

神崎「俺は認めない！..！」

松風「聖也！！」

神崎「フイフスセクターだぞ！？・・・サッカーを潰したシードを・  
・・誰が認めるか！？！」

水鳥「神崎！？・・・試合前から思つてたが・・・神崎は、剣城が出場  
の時もお前は・・・！？」

だから・・・

神崎「だからなんだ！？・・・うつーシードは・・・最低最悪  
な・・・人間だ！？」

董「あ・・・。」

小さく苦し紛れな声を出す。

バシイイイー！

水鳥が神崎の頬を叩く。

神崎「いっ！…つう！…あ…。」

水鳥「まだわかんないのか!? 董がどんな思いでシードであること  
を打ち明けたか…。最低最悪はお前だ!!！」

なんで…？

神崎「俺は…間違って…」

言い掛けた時

円堂「神崎の気持ちもわかる…。だが、俺は董の気持ちもわか  
る。」

董「ひっく…う…う…あ…つ…うう…」

めんなさい・ゆ・・・・・ち兄さ・・・ん・・・「めんなさい」・・・  
・・・・拓人・・・・『めんなさい・・・皆さん・・・・!・!・!・!

神童「泣かないでよ・・・董・・・。」

董「うあ・・・あああん。」

しばらく我慢してたことが全て吐き出されて涙が止まらなかつた。

落ち着くまで・・・拓人の家にいた。

京介のことも考えて、優一兄さんのことは何も言わない・・・。

ただ、苦しみだけを拓人に伝える。

董「私じゃ、暴走してる京介を止められない・・・私が京介を守らないといけないのに・・・！」

神童「氣が済むまで」ひいてこころ。一緒にこころ。

夜中に帰つた。

家には監督が『まかしてくれたらしい。

次の日の朝。

董「京介・・・！私・・・シードがやめたから！」

剣城「あつそ、俺はシードやめないけどな。」

董「京介、優一兄さんがそれで喜ぶと思ひの？」

しかし、京介は出でていった。

董「すみません、監督・・・京介を連れていけませんでした。」

田舎「ここから・・・マネージャーの仕事・・・頑張れよ・・・。」

董「はい・・・」

西園「いけえ・・・。」

西園くんは連絡してゐる・・・。

ぶつぶつびびジャンプだつて・・・。

あれ? 松風くんがいない・・・?

夕方

松風「董先輩、『めんなさい』。」

董「へ・・・?」

なんで謝るの・・・?」

松風「実は剣城のあと付けて・・・お兄さんにあつてしましました・  
・・・。」

董「えええええええ――――!..」

そんな・・・。

京介は超絶ブラコンだよ

董「・・・いいよ、別に隠すことじやないし・・・。でも、恥ずか  
しいから誰にも言わないでね。」

松風「はい！」

## 帝国の猛攻！！

次の試合相手は帝国になっていた。

帝国学園の監督はイナズマ・ジャパンの鬼道である。

しかも、帝国学園はフィフスセクターの支配下にあり一番、フィフスセクターへの忠誠が高いのである。

それを告げる円堂。

神崎「鬼道監督つて・・・鬼道様つて・・・あのイナズマ・ジャパンの人ですよね！？？？」  
「？」

円堂「それは俺にもわからない・・・。」

音無「兄さん・・・。」

速水「そういえば、フィフスセクターからの指示はないんですかあ？」

董「・・・それないです、もはやここまで勝ち上がってきた雷門

イレブンに・・・勝敗指示を決めることは無意味なのです。  
言つとなれば、負ける・・・といふこと。」

車田「今更、負けることなんか考えられるかーー！」

天城「本気を出すぞーー！」

皆の意氣込む様子。

神童「じゃあ、必殺タクティクス、アルティメットサンダーの練習だーー！」

霧野「ああーー！」

再び、必殺タクティクス、アルティメットサンダーの練習を始めていた。

放課後・・・

神崎「あの、・・・董・・・先輩・・・。」

董「・・・神崎くん・・・。」

神崎「後輩なのに生意氣言つてすみませんでしたーーー！」

董「・・・か、かんざ・・・

神崎「俺は最低です！…よく考えたんです！…・・・ていうか、天馬が言つてました！サッカーが好き、サッカーが好きだから、裏切りたくないから・・・シードをやめたんですね？」

董「ふふ、ありがとう！」

ニコツと笑う。

神崎「・・・うつ・・・・。」

なんだ・・・董先輩つて・・・超かわいいじゃねえか！！

神童と付き合つてるつて噂・・・本当なのか！？？

というかこんなかわいい人が姉なんて羨ましいぜ、剣城が！  
つーか、剣城にもつたいない！？！

対決当日の朝。

董「京介・・・

剣城「出ないからな。」

言つ前に言われちゃった・・・。

董「何も、協力しろとは言つてない・・・。シードとして出る必要があるんじやないの?」

剣城「・・・。」

まあ、あの万能坂戦の後で、シードとして動くのはきまづこのはわかるけど・・・。

董「京介!!!」

出て行こうとする剣城を引っ張る董。

剣城「放せよ!!!」

董「絶対・・・出てもういつからっ・・・」

すると剣城は化身を生み出し、抵抗する。

董「現れよ・・・・、光の戦士・・・・勇者アウトレスス!!!」

とはいへ、玄関口のため、ドアにひびが入る。

剣城「…………！」

むりやり董を突き飛ばし、走り去つていく。

董「つ……いたた……、1つ違いだと男の女の差になっちゃつうのよねえ……。せめて4つくらい違えば勝てたかもしけないけど……。……待て！！京介っ！！！」

追いかける董。

神崎「遂に、剣城は来ないのか……。つたく……。」

松風「……董先輩……。」

神童「信じる……。董が……剣城を連れてくることを……。」

「

遂に、帝国戦が始まる。

キックオフは神崎。

神崎「おおおおおおおおおお…！」

しかし・・・

ドオン！！

ボールを奪われる。

神崎「くそつ・・・！」

ボールが高く飛び上がる。

西園「行かせない！！！ぶつとび・・・

「邪魔だ！！」

しかし必殺技は邪魔され失敗する。

何度も何度もゴールにボールが来る。

帝国は強い。

「皇帝ペングンフ号！…！」

遂にはゴールを入れ、西園が負傷してしまつ。

神崎「信助・・・・！」

再び、キックオフするのは神崎。

取り囲まれた。

神童「こっちだ！！」

バスを渡すも・・・

ドンッ！！

バスは失敗する。

神崎「あ・・・ぐ・・・・！…させるかあ…！」

ボールが奪取した。

神崎「天馬ア！…！」

ボールをバスする。

松風「よおし！…！そよ風ステップ！」

うまくパスつなぎで相手、ゴール前に神童がいた。

神童「フォルテシモ！！」

「フフ・・・！」

なんと、神童の必殺技であるフォルテシモを素手で受け止めた。

全員「！！」

剣城「・・・兄さん・・・。」

優一「・・・京介・・・なんで・・・京介は試合に出ないの・・・？」

よく見るとサッカーの中継を見ている。

董「京介っ！…やつぱりここ…！…西園くん怪我したんだよ！？今は10人…！京介がないと…！…！」

剣城「……………。」

黙る剣城。

優一「…京介…？」

不信感を覚えている優一。

董「京介！…！」

剣城「…………俺、…………水…………飲んでくる…………。」

逃げるよう立ち去っている。

董「…。」

もう、覚悟は決めた…。

言つしか…ないんだ…。

再び得点が入れられていた。

神崎「ああ・・・！・！・！俺が不甲斐無いから・・・・！」

神童「神崎だけのせいじやないよ・・・。」

神崎「アルティメットサンダーをさせてください！・！・！」

神童「・・・神崎・・・・。」

神崎「俺はテクニックはないけど・・・シューート力ならあります！  
！」

キヤプテンである神童と、倉間が何度も失敗したアルティメットサンダー・・・・。

神童「わかつた。」

バスが流れ、イナズマのようになる。

天城「神崎！・！」

神崎「うおおおおおおおおーーーー！」

いけるか・・・？

神崎「アルティメットサンダーアアアーーーー！」

しかし・・・

真上にボールが行く。

神崎「うつーーー！」

そのまままたに落ち、吹っ飛ぶ神崎。

神童「神崎つーーー！」

松風「聖也ーーー！」

倒れている神崎。

神崎「へへ、大丈夫ですよ・・・。1年が・・・でしゃばりすぎたかもな・・・。」

ほんとは、体中がすごく痛い・・・けど・・・

10人しかいない今・・・へこたれてる暇なんかねえ！！！

優一「・・・京介・・・」

剣城「・・・。」

明らかに、さつきとは違う董と優一の表情。

まさか・・・と思つた。

優一「全部・・・董から・・・聞いたよ・・・。」

剣城「・・・全部・・・。」

あの真剣なまなざしの董を見て・・・確信した。



信じる、信じない！それこそ信頼！！（前書き）

厨2病な題名ですよね・・・・。

信じる、信じない！それこそ信頼！！

帝国の強さに抗戦する雷門。

速水「あああ・・・。もうダメだあ・・・！」

神童「くつ・・・！」

ドオン！！

神童がボールを奪われた。

「神崎、お前が何を言つてゐるか理解せぬ。」

神崎が奪い返す。

神崎「天馬！！」

松風にバスをする。

松風「よおしつー！」

ゴール手前までぐるぐると・・・

「ペンギンフードー！」

כונת עלייה

松風「うわあつ！！」

優一「京介！・・・なんで試合に出ないの！？」

劍城

ただ、顔をそむけるだけだった。

優一「董から全部聞いたし・・・フィフスセクターの人と話をして

るのを見た。」

剣城「！」

董「京介！！」

優一「びりして・・・・・！――びりしてサッカーを裏切ったんだ！――？」

私も京介も・・・優一兄さんが怒ったところを見たのは・・・

生まれてきて、初めてだったかも知れない・・・。

優一「お前は・・・サッカーを裏切ったんだ！――！」

そして、優一兄さんが初めて見せる涙・・・。

雷門に来て・・・少なくとも私は変わった。

それは・・・松風天馬くんと円堂守監督のおかげかも知れない。

一生懸命頑張つて・・・ファイフスセクターに逆らつて・・・。

そして・・・皆が・・・！――頑張つて・・・――！

「本当のサッカー」の楽しさと・・・「仲間」の大切さを教えてくれた・・・。

私にできるひと・・・それは・・・。

董 「・・・京介・・・試合に行こう・・・!」

前半が終わり、皆が悩んでいた。

松風 「・・・みなさん・・・。」

倉間 「今度こそダメだ!!」

速水 「うわあああ・・・。もう勝てないですよ。アルティメットサンダーも完成しないし、10人しかいないしい。」

神童「くつ・・・・。」

皆の心が折れかけた時。

「・・・・試合に・・・俺を出せー!」

全員「ー!」

松風「剣城・・・?」

董「円堂監督ー・・・・弟を・・・京介を連れてきました。」

一ツと笑う円堂。

音無「良かつたわ、これで11人! そしてもしかするとアルティメット・・・

神崎「良くないですよ・・・! 剣城はファイフスセクターのシードなんですからー!ー!」

神崎くん・・・・。

水鳥「神崎！！」

倉間「そ、うだ。・・・万能坂では活躍したが・・・あれ以来練習にも来ない・・・。信用できないな・・・。」

剣城「・・・・・。」

・・・・・。

董「私も・・・本当に京介を信用したわけじゃない。」

全員（円堂以外）「！？」

董「信じてるつていつたら嘘になる・・・。けど、信用してないつていつても嘘になる。」

松風「・・・・・、俺は剣城を信じます！」

天馬くん「・・・！」

神童「俺も信じます！」

拓人「・・・・・。」

西園「僕も！」

そして「・・・全員「・・・・・。」

剣城「・・・・・・・。」

田堂「皆がそいつってくれると信じていた。・・・ナイスだ董！！」

董「はい！」

神童「（せうか、そいつをわせるために・・・しむかるために・・・。）  
こつなることを予想して・・・。董と田堂監督は考えてたんだ。」

董「じゃあ、優一兄さんが見ることだし・・・後半がんばっちゃって！――！」

剣城「ああ、「兄さんのためにな」。」

はいはい、生意氣全開、この調子ならやってくれれるよね。

後半が始まる。

車田「ダッシュトレイン！――！」

車田が奪ったボールをつなげ・・・

アルティメットサンダーを剣城で決めることになった。

神崎「・・・・つ。」

なんで・・・剣城なんかに・・・つ！――！

董先輩は優しいしかわいいし・・・俺達になんにもしてない。

けど・・・剣城は・・・！

雷門を潰そうとした。

入学式だつて・・・オングール決めた時だつて・・・。

練習にさえ来なかつた・・・。

剣城を・・・誰が信じるんだつ――！

剣城が放つたアルティメットサンダーは一直線に行くものの、暴発せず終わる。

剣城「！？」

神童「……なんでだ……！」

董「……。」

心が……まだぐらついてる……？

松風「剣城！！」

神崎「……天馬……、わかつただろ？剣城は……信頼でき  
ないって。」

松風「信じてる……。」

え……！？

松風「信じてる！……サッカーだって剣城を信じてるよ！……サッカー

を裏切っちゃつだめだよーーー！」

剣城「・・・・サツカ一・・・・！」

董「……心心……。」

さすが天馬くん・・・。

尊敬しあやうなあ・・・。

横で田舎がうそりと顔を上へ下へせっていた。

後、円堂監督もね・・・。

再びアルティメットサンダーに挑戦、そして・・・

ディフェンスを突破した。

皆の顔を晴れた。

神崎「なつ・・・！」

剣城が・・・アルティメットサンダーを完成させた・・・?

俺も・・キヤプテンも・・・倉間先輩も・・・完成できなかつたア  
ルティメットサンダーを・・・?

松風「サツカ一も剣城を信じてたんだ！！」

ウソダロ・・・?

ウソダヨナ・・・。

オレ・・・デウシタラ・・・?

オレッテ・・・ヒツヨウ・・・?

松風が得点し上々になる。

霧野「ザ・ミスト!」

霧を発生させ、霧野の姿が消える。

そして背後にせまりボールを奪う。

霧野「神童つ!..」

ボールをパスする。

神童「よし・・・。アルティメットサンダーの位置に付け!..」

そしてパスは回され、

剣城「アルティメットサンダーつ!..」

再びディフェンスを突破する。

神崎「俺だつてなあ――――――俺だつてえええええつ――――！」

化身を生み出す。

神崎「聖靈フェアリーっ！――！」

ボールを取り・・・

神崎「化身の力あああつ――！俺は・・・勝ちたいつ――！」

気が集中する。

神崎「フェアリーアロー――！」

ボールはやりのよつにつきます。

「パワースパイク・・・！うわああああつ――！」

得点した。

そして再びアルティメットサンダーでティフェンスを崩した・・・。

神崎「おっさきい――！」

しかし・・・

ディフェンスが立ちはだかる。

今度は予測して、ディフェンスが崩せなかつたのかもしぬない。

神崎「くつ・・そお・・・。」

剣城「バスだ！！」

なんで・・・。

ナンデ・・・。

アンナヤツ二バスシナキヤイケナインダ・・・？

「もうつたあ！！」

松風「バスして聖也！！」

西園「聖也あつ！！」

神童「神崎イ！！」

神崎「いやだ・・・！－！－！－！－！－！」

でも・・・バスしなきや・・・負ける・・・。

全員「神崎——つ……！」

皆の意見なんかに惑わされるか・・・・!-!-!-!

神崎「俺は・・・俺だああああああああつ・・・・・・・

神崎「俺からのパスだ！！！失敗は許さないぜーーー！」

剣城にパスをした。

剣城「フツ・・・！」

剣城「わかつてゐーー！」

ゴール手前にくる。

剣城「デスドロップーーー！」

新必殺技で決め……

雷門は3・2で勝利する。

得点したのは全員1年。

それは二〇一〇年初めてだつた……。

## 神崎の眞実

今日の母との顔はいつになく真剣だった。

聖也の母「あのね、聖也。」

神崎「ん？」

嫌な予感しかよぎりない。

聖也の母「実は・・・アナタは一人つ子じゃないのよ。」

神崎「・・・は？」

一人つ子じゃない・・・？

聖也の母「アナタには・・・重い病気の姉がいるの・・・。」

回想

アナタが生まれてすぐ、お姉ちゃんは病気になつたわ。

白血病・・・。

治りはしたけど・・・再発を繰り返しているわ。

「大丈夫・・・だよ・・・つ・あー。」

聖也の母「心配しないで、すぐここ治るわ・・・。」

「うん、治らないよ・・・。」

聖也の母「いいえ！絶対治るわ！・・・。」

終了

神崎「・・・そんな・・・。なんで隠してたんだよ！？」

聖也の母「・・・病気を治すためには・・・莫大なお金が必要で・・・  
・アナタに苦しんでほしくなかつたのよ・・・。」

神崎「・・・。」

聖也の母「明日、お見舞いに行くわよ。」

神崎「・・・部活終わってからな！決勝戦だから氣を抜くわけにい  
かねえからー！」

部活終了し、病院へと向かい……

エレベーターで……

董「あ、神崎くん！……お母さん？」

剣城「…………」

聖也の母「」んには、神崎聖也の母です。」

董「私は雷門サッカー部のマネージャーの剣城董です。」  
「」は弟の京介です。」

神崎「……剣城、董先輩……なんで病院に？」

剣城「……俺の勝手だろ。」

おこ・・、帝國でのアイツはねづつした?

同じフロア同じ廊下を行く。

董「どうしまで一緒になんでしょう・・・。」

剣城「・・・・。」

董「へえ・・・隣なんですね・・・。」

部屋の名前

剣城優一

神崎聖子

剣城・董「（姉いたんだ・・・）」

神崎「（兄いたんだ・・・）」

優一「……あ、来てくれたね……遅いね……って当たり前だよね……ちゃんと部活してたんだから。」

董「うん、結構京介も頑張つてたよ」

剣城「あの……兄さん……。」

優一「……帝国戦頑張つてたね、この調子で頑張つてね。」

剣城「あ、ああ……。」

・・・ほんと、神崎くんのお母さんの前でも態度を変えなかつたのに・・・

ブランだね、重度の。

すると隣の部屋から聞こえてくる・・・

聖子「…………聖也…………って…………いつんだ……。」

神崎「…………。」

聖也の母「…………アナタの姉よ。」

髪は抜け落ち、弱弱しい。

優一「隣の人ね…………白血病なんだ……。」

董「…………神崎くんのお姉さん…………。」

優一「弟に自分がいる」と隠してるんだって。」

「…………そうなんだ……。」

だからいつもの元気がなかつたのね。

部活だつて……

回想

神童「ぼーっとするな、神崎！！決勝も近いんだぞーーー！」

神崎「あ、はい！すみません！」

剣城「…………」

終了

優一「同じ一年で雷門サッカー部らしいよ。」

董「うん、元気いっぱいサッカー大好きなんだよ。」

優一「親近感わいちゃって相談に乗ってるんだ……。」

少し顔が赤い優一兄さん……。

かわいいかも……。

董「もしかして、神崎くんのお姉さん好きなんだあ？」

優一「わっ・・・ち・・・ちがつ・・・やめてよ、董…！」

わわつ焦つてる！

かわいいつ！

剣城「姉さんも人のこと言えないけどな。」

董「ちよつ・・・京介つ！！」

剣城「神のタクトの異名を持つ、雷門のキャプテン・・・。」

優一「それって、神童拓人くんだよね、へえ・・・好きなんだ・・・！」

剣城「しかもカッフル・・・。」

董「やめええええええええつ！…！」

声を張り上げてしまつた・・・。

すると・・・

ガラつ

聖也の母「すみません・・・今大事な話をしていて・・・。」

優一・董「あ、すみません・・・・。」

パタン・・・

剣城「怒られた・・・す・み・れ・ね・え・さ・ん」

あ・・・遊ばれてるうううううううう！――

ニヤつと笑う、悪戯な顔！――

どうだな！！！

すると隣が・・・

かなり物騒な話してる・・・。

神崎「俺なんかよりも・・・。」

聖子「違うよ・・・。」

すると、優一は車椅子に乗り、隣の部屋に入る。

剣城・董「！！」

優一を追いかける2人。

優一「・・・聖也ぐんだつけ？」

神崎「・・・。」

聖子「優一さん・・・。」

董達も入ってくる。

優一「董達がいってたよ・・・明るくて、いつも練習頑張ってる

つて・・・。

神崎 「・・・・。」

董「…………神崎くん…………。」

その結果といふ。

剣城「！？つ・・あ！－おい、待てよ神崎！－！」

それを追いかける剣城。

優一「京介！」

董「神崎くんっ！！！」

體や)の由「(」めんたい・・・・。」

董「い・・・いえ・・・。」

聖子「うう・・・うう・・・。」めん・・・。聖也「

涙を見せる聖子。

優一「聖子さん・・・」

すかさず聖子に近寄つた。

董「…………優一兄さん…………。」

外から悲鳴が聞こえてくる。

ハツと窓を見た。

神崎と剣城は化粧を出していた。

董「京介つ！！！」

神崎「俺は・・・誰にも必要とされてないんだあああああああつ

！――！」

剣城「（――）は病院だ・・・・・化身を暴走させると病院が・・・兄さんが・・・つ――」

化身がぶつかり合ひ。

聖子「・・・・聖也・・・・？」

董「・・・・くつ・・・・、京介ええつ――」

剣城「任せておけ――！」

転がつてくるサッカーボール。

化身を消し去つた。

剣城「デスドロップ…・…・…」

ショートで聖也の化身を消す。

聖也「ハア、ハア、はあ・・・・。」

剣城「むやみに化身を出すな、一部のシードが化身の暴走に巻き込まれて命を落としたこともあるからな・・・・。」

聖子「…めん…・・・・…」「めんね…・・・聖也あ…・・・」

号泣している聖子。

董「…・聖子さん…・・・。」

その背中をわざつてこる優一。

董「・・・優一兄さん・・・。」

呼んでも振り向かない・・・。

優一兄さんから必要とされてないのは・・・私と京介の方かもしない・・・。

革命（かぜ）を起しせー

田堂「よひ、神崎！」

神崎「……おはよひ」わざこます……。」

いつもの元氣がない神崎。

田堂「どうした？」

神崎「ほつておいてください……。」

董「神崎くん……昨日の」と……。」

松風「聖也……どうしたんだろう？」

董「神崎くん……昨日の」と……。」

神童「昨日? どうしたの?」

董「い、いや……色々あつて病院に行つてたんだけど……セレニティ神崎くんのお姉さんがいたらしくて……。」

剣城「・・・隠し子つて奴。」

三国「・・・隠し子か・・・。」

董「それで・・・。」

回想

神崎「俺は愛されてないんだ！！」

終了

董「つて・・・。」

松風「・・・聖也・・・。」

すると円堂が声をかける。

円堂「鬼道と佐久間からの正体だ、帝国に行く。」

全員「えええええー————ー？！？？」

音無「本当に兄さんに会こに行くんですか！？」

そう、まさか敵に直接会こに行くという。

速水「うわああ、何かされるんですよーー。」

倉間「んなわけない。」

浜野「でもさあ、監督つてよくわからなこしたあ・・・。」

とまあ色々戸惑いの声を上げてる雷門メンバーで・・・

神崎「うおおおおおおおーー鬼道様と佐久間様に会えるっ！ーーー！」

会えるのかつーーーつれしつーーー！

車田「…………あれでか？」

董「…………あ、はは…………。」

単純・・・・（笑）

円堂「だから夜遅くまでかかるぞ。」

董「じゃあ、優一兄さんの見舞いはあきらめよ。」

剣城「ハア…………。」

それくらいでため息吐くな。

神崎「やつた―――つ―――！」

・・・神崎くん・・・。

会いたく・・・ないのかな・・・？

私もなんとなく・・・優一兄さんと神崎くんのお姉さんが仲がいいところを見ると・・・苦しい・・・。

佐久間「こちらだ。」

しなかつた。

的中・・・

速水の心配は

速水「何かされるですよーーー。」

車田「んなわけねえだろつ！」

佐久間が案内する場所。

そこには・・・

久遠「・・・・・」

音無「久遠監督っーー！」

久遠「久しぶりだ、円堂。」

円堂「はい。」

そしてその先に・・・

円堂「つ・・・・・響木さん！」

音無「雷門理事長ーー！」

十年前の懐かしい面々。

話によると、レジスタンス達に鬼道と佐久間は協力していたらしい。

そして、雷門が地区大会のホーリーロードで優勝していく、選挙でイシド・ショウジを落選させ、響木を新たな聖帝にし、新たなサッカー界を築く・・・。

それが目的らしい。

その革命といつのかぜを起しきことができるのは

雷門。

雷門イレブンのみである。

それには地区大会で優勝しなくてはならない。

速水を除けば盛り上がっていた。

董「なんかかかることにならなかつたわ。」

剣城「…………。」

おい、無視か。

董「革命だつて！革命！……かつこいいなあ……」

剣城「いいか、姉さん……俺達は革命を起しよると同時に罪滅ぼしをしてんだよ……」

董「革命を起しよつたのが、罪滅ぼしこつながるじやない……」

あー、なんかウキウキといつか……

正義つてやつぱ気持ちい。

学校にて……

速水「ハア・・・・・。」

董「速水くん、顔色悪いね？ 具合・・・・良くないの？」

速水「違いますよつー・・・・・昨日のことを見聞いて何も思わないんですか！？」

董「え・・・・？」

速水「革命だなんて・・・・無理に決まってるじゃないですかあ！」

董「そ、そんな・・・・・。」

ポジティブだなあ・・・・。

速水「そんな」と・・・・ただの中学生ができるわけがないじゃないですかあ！」

董「・・・・そんなことないよ、皆で力を合わせれば・・・・。」

速水「失敗したら何かされるんですよーーー！」

董「やる前から失敗から考えないでよーーー！」

速水「何かされてからじや遅いんですねーーー！」

なんてポジティブ・・・・。

口は京介みたいに達者だな。

倉間「ジビツ。」

速水「なんとでも言つてくださいこいつ…」

## 部活動

皆が思い思いの練習をする。

異常なまでのテンションの浜野。

そこへ円堂の携帯が鳴った。

円堂「はい・・・、はい・・・、全員がシード！？はい、わかりました。」

全員「…」

音無「全員がシードって…？」

へえ・・まあ・・・大変な」と。

車田「じゃあ・・・全員が化身使い・・・。」

剣城「それは違つた、シードだからって全員が化身を使えるわけじ

やない。」

董「化身は気の高まり・・・つまり精神とサッカーの上達さを比例してやつと生み出されるものなの。だからサッカーがいくつまくたつて、精神が強くなければ化身を生み出す」とはないわ。」

2人の話を聞き、少し安心して一同。

そして・・・本格的な練習が始まった。

松風「うおおおおおーー！」

松風の背中な黒いものが渦をまいていた。

剣城・董「（あれは・・・・化身！？）」「

放課後

董「・・・神崎くん・・・。」

神崎「俺は・・・絶対・・・・・。」

行かない・・・。

俺はサッカー革命を起こすのに・・・忙しいんだ・・・・・。

父さんがやつていた熱いサッカーを取り戻すのに・・・。

姉貴は邪魔なんだよ・・・。

## 海王戦！－大量シードの策略－（前書き）

このままだと本当にアニメに起こつるので、オリジナルな企画回や  
董のプレーを描くものを書いて、時間潰していきたいと思います。  
できたらイナズマジャパンの誰かを出したい・・・。

## 海王戦！！大量シードの策略！

珍しく、京介が天馬くんの特訓に協力的だった。

やつぱり、あれは化身だったのかも・・・。

董「そろそろお昼よ」

車田「あ、そういえば、お昼持つてきてなかつたなあ。」

神童「董・・・。」

董「大丈夫ですよ！12人+6人分作つてきましたから。・・・料理が得意なんで拓人の家の材料で作つてきました。」

速水「なるほど、だから練習に来てなかつたんですね・・・。」

田堂「本当かー?」

董「でも・・・田堂監督・・・弁当持つてきつますよね・・・。」

田堂「あ、こや・・・」れは・・・あせはせ。」

松風「(まさか、夏末さんに作つてもうひたるさじやあ?)

音無「(やうなのよ・・・。)」

一人ずつ弁当を配る。

剣城「ま、糞まづいけどな。」

神童「おい、剣城! ! !」

神崎「食つ前から言つなー。」

皆が弁当を開ける。

速水「おおっ! おこしあつです! ! !」

浜野「おおっ魚が入つてんじゃん！！」

倉間「彩はいいが・・・後は味だな。」

霧野「食べてもいいか？董。」

董「いいよ。」

全員「いただきまーす！」

松風「うわーっ！…ずつじくおこしいですっ！…秋姉と同じくら  
い・・・いやそれ以上に…！」

西園「おかわりしたいくら…！」

神崎「剣城イー、お前はこんなおいしいもの毎日食べられるのが、  
幸せだな。」

剣城「…・・・フン・・・。」

神童「おこしこよ、董。」

霧野「うわあー。」なんなおじさん弁当はじめてなぐら。」

速水「毎日」みんなおいしい弁当食べたいです。」

倉間「思い以上にうまいな、これ。」

浜野「うーん……季節のさんま&卵焼きうまい……」

車田「これはいい神童の嫁だな。」

天城「これで元気が出るドー！」

三国「これを見習いたいくらいだせな。」

水鳥「すっげえうまいじゃん！！」

西「フフフ、どうしたらこんなに料理がうまくなるの?」

葵一 どうでもおいしいです、董先輩！」

「ほんとうにでもおいしいわね、あたしなんかぶりも……」

董「盐泽めすきですよ・・・。」

円堂「さてと、海王戦に向けて！練習だ！！」

放課後

速水「無理ですよ・・・。無理なんですよ・・・。」

董「速水くん。」

速水「董さん・・・。」

董「大丈夫！勝てるつてーー！」

速水「・・・。」

海王戦当田・・・。

バスの前

一乃「あ・・・あのー!」

そこには一乃七助と青山俊介がいた。

神童「一乃、青山・・・。」

円堂「?」

音無「元サッカー部です。」

青山「あ、あの・・・一緒につれていってくれませんか!-?-?」

全員「-.-」

車田「退部したのに!何をこまさり・・・!-!-!

倉間「練習もなしに試合につれていけるわけねえだろ。」

と乗り気じゃない顔。

神童「わかつた。」

霧野「神童！！」

神童「革命<sup>かぜ</sup>を起こすには、少人数ダメだからな・・・。」

董「拓人・・・。」

拓人・・・優しいのね。

遂に海王戦が開幕。

負けは許されない。

一乃と青山はベンチ。

キックオフは神崎。

神崎「よし・・・。」

ゴールに向かつて突き進む。

「進ませないぞ！！」

神崎「くつ・・・。」

剣城「こつちだ！！」

神崎「ああ！」

ボールを高くあげ蹴った。

剣城にパスが回った。

だが・・・

「行かせるか！！」

スライディングを決める。

そのままこつちのゴールへと向かつた。

神童「天馬！…やうせないぞ！…」

松風「はい！…」

しかし、相手は高くジャンプしてかわした。

董「さすがシード・・・。一筋縄でいかないわね・・・。」

そして、ゴールまで到達。

そのまま点が入った。

三國「くうつ・・・・・…」

再びキックオフ。

剣城と神崎のパス回しで、ゴール手前まで来た。

神崎「倉間先輩……お願いしますっ……」

倉間「ああ……」

倉間先輩ならいけるつ……

倉間「サイドワインダー……」

必殺技を使う倉間。

しかしあっけなく止められ、

そのまま形成逆転……

2点、3点と・・・じょじょに奪われていく。

羽ばたけ！天馬の化身！

前半の終わりに剣城がデスドロップで決め一点は取れた。

前半終了し、円堂から告げられたのは・・・

GKを松風にする。

円堂の考えがわからないメンバーだったが・・・。

松風天馬に期待をし、

後半が始まった。

神崎「天馬のところまでボールは行かせないぜっ！！」

神童「神崎！」

神のタクトで導いた。

神崎「化身をつか・・・・・つ！！」

DFが邪魔をする。

神崎「チツ・・・・。剣城・・・・！」

振り返りパスを試みるも・・・

神童と剣城はマークされていた。

董「まんまと化身使いはマークされてたわね。」

DFT止められず、おのずとGKまで来た。

神崎・西園「天馬っ！？」

松風「（俺に・・・本当に・・・止められるのか・・?）」

# 劍城「松風！！」

松風「……劍城……？」

剣城「サッカーを取り戻すんじゃなかつたのか！？？？」

剣城に声援が響いた。

そこに背中に黒い渦が舞う。

円堂「・・・天馬はMFだから、真正面からボールを蹴つたことがなかつた。」

董「じゃあ……！」

円堂「真正面からボールを受けるといつで化身を生み出せる。」

遂に化粧が現れボールを蹴り返した。

神崎「やつたじやねえかあ！！！」

ボールが回ってきた。

神崎「スマッシュファイヤー！！！」

ボールが炎を身にまとい、回転しながらゴールに突き刺した。

そして・・・

剣城「デスドロップ！！！」

同点に追いついた。

ボールが速水のところに転がつてくる・・・。

速水「（化身が・・・。最初は無理だと思つていました・・・。けど・・・俺はただ、決めつけていた・・・。）」「

速水「できるかできないか、やってみなきゃわからない！――！」

速水「ゼロヨン！――！」

FMとMFを抜け、松風にパスをした。

董「速水くんつ！――！」

やつた、決めてくれた！――！」

松風がDFを抜けようとする。

松風「うおおおおおおおつーーー魔神ペガサスーーー！」

DFを抜け、神童にパスした。

神童「フォルテシモーーー！」

遂に追い抜き・・・

雷門が勝利した。

神崎・西園「やつたあああ！……天馬あ―――つ――！」

松風「あはは、やつたんだ……！」

過去と重なる思い、そして合宿

神崎の家

聖也の母「どこで遊んでたの? 火曜日はお姉ちゃんのところに行く約束よ。」

神崎「つるせーなあ・・・。今日は練習が長引いたんだよ。」

聖也の母「私が行った頃には京介くんと董ちやん制服のままで病院来てたわよ。」

アイツら直行かよ! ?ええ! ?

神崎「あいつら・・・早く帰つてさ・・・。」

聖也の母「董ちやんが今日は早く終わつたって言つたわよ。」

だああああああ! ! ! 董先輩真面目ですね、ほんと。

聖也の母「早く行きなさい、じゃないとサッカーさせないわよ! ! !

神崎「サッカーさせないって・・・皆の迷惑になるじゃねえかよ! !

！――！」

聖也の母「なら早に行きなれ。」

めんどくせえ……。

あんな奴に・・・会いたくないんだよ・・・・・。

ニヤリと笑った。

優一「昔から人見知りが激しいから友達がほとんどいなかつたけど、雷門に来て、董・・・明るくなつたよつな気がする。」

剣城「彼氏もできたしな。」

董「へ、うねやこ……」

ノンノンとノックの音がする。

聖子「……優一さん……あ、董ちゃんと京介くんもいたのね。」

剣城・董「……」んばんは……。

聖子「……試合……見たわよ。」

董「あ、ありがとうござります。」

聖子「京介くん、かつじょみかつたわ。」

剣城「……」

あれ……なんか視線感じる……。

そこには……神崎くんがいた……。

董「神崎くんっ！…！」

聖子「聖也…？」

逃げ出そうとする神崎。

董「神崎くん！…！」

神崎の腕をつかんだ。

神崎「…・・・っ！」

思つたより董先輩の力強いな・・・。

さすがシードって・・・といろか。

無理矢理に神崎が病室に連れた。

神崎「董先輩・・・。」

董「いいのかなあ、円堂監督にこのこと話すよ？」

神崎「つ・・・。わかりましたよ・・・。」

聖也「あ、あのね、聖也・・・。」

神崎「なれなれしく聖也って呼ぶな！！」

董「姉弟なのに・・・。だつたらびりつ呼ぶの？」

神崎「姉弟なんかじゃない！？」

うわあ、・・・FMつて生意氣多いな・・・。

董「聖子さん、弟なんかに負けちゃダメですよ。弟なんて生意氣で  
バカで厨二病で・・・」

ガンツ

いつた！？

足蹴られた・・・。

京介に・・・。

董「なあにFMの蹴りを女に入れるんじゃい！――！」

蹴り返した

剣城「つ――てめー足痛めたらどーすんだよ。選手だぞ！――！」

董「アンタが蹴ったからいけないのよ！――！」

剣城「てめーがいけねえんだよ！――！」

董「私に何も京介のことなんかいつてない！……」

剣城「んだと・・・テメエ・・・。」

董「姉に向かつてテメエつて何よ？」

剣城「目の前にいる超ウザつた女のことだつ！……」

董「名前は！？？？」

剣城「剣城董！？！」

董「やつを悪口いつたのは目の前にいる最低な男剣城京介！……」

剣城「なん・・・・・・

優一「やめなよ！二人ともつ！……」

あ・・・。

京介のせいだあああああああつ！……

董「まあ、こんな感じでいいんですよ、聖子さん。」

聖子「あ・・・あははは・・・。」

はい、私が悪かつたよ。

元は京介だけど。

神崎

董一姉弟なんて必ずしも仲がいいってわけじやないんだよ。」

神崎 - 元弟と元妹はしのに?

劍城  
董優

はく 答えなし

本当に董先生と飯坂にて仲かしいんだよ。。。

卷之三

祖嶠 - 帰る - !!!

董  
· · · 神嶺くん  
！ ！」

聖子「待つて！！」

聖子が追いかける。

階段を走る神崎。

## それを追いかける聖子。

神崎一  
追いかけてくんなんよ・・・わあ！？」

足を滑らせた

聖子—聖也！—？

卷之三

ふつが二た

神崎一  
・  
・  
・  
・  
姉貴・  
・  
・  
・  
?

金でかくす。口もシミンたつた。

卷之三

姉貴か  
・  
・  
・  
・  
転け落ちていく  
・  
・  
・  
・  
・

又「たゞたからわかた」

備を上に突き飛にして・・・

庇つてた  
・  
・  
・  
。

声に駆け付けた三人。

董「つ・・・！聖子さんつー！？」

剣城「・・・つ！」

優一「誰か・・・、先生・・・先生を呼んで・・・ーは、早く！」

董「あ・・・うんーーー！」

状況を聞けば・・・

神崎くんが足を滑らしたのを庇つてそのまま・・・。

そうか・・・あの日・・・なんだ・・・。

同じなんだ・・・。

聖子さんは集中治療室に運ばれ・・・

危ない状態。

神崎「俺は・・・。」

さすがに・・・気落ちしてるのかな・・・。

神崎「悪くない・・・。」

剣城「なんだと・・・?」

酷い・・・! -

神崎「・・・助けてなんて言つてないし・・・助けて方が悪いんだ  
!! -

私は  
・  
・

乾いた音が廊下に響いた。

神崎くんの頬を叩いてた・・・。

神崎「つ・・・！」

董「・・・助けてなんて誰も言わないよ・・・。・・・自分のため

に犠牲が出るくらいなら。」

だけど・・・

董「罪意識にさいなまれるのが普通じゃないの！？？私達間違つてゐー！？？」

あ・・・どうしたんだ・・・董先輩・・・。

董「助けてもらつたのにその人を責めるなんて・・・サッカーでの失敗を責めてるのと同じよ！？！」

神崎「う・・・。」

董「謝つてよ！？！」

また響く・・・董の声。

優一「（京介が帝国戦で運命の決着をつけたのなら・・・董の運命の決着は・・・きっとこれなんだね・・・。見せてもらつたよ・・・。董の本心・・・。京介のこと・・・十分に任せられるよ・・・。）

次の日、聖子の意識はいまだに戻らなかつた。

## サッカーラ

董「えつと・・・明後日の合宿に向けての予定表よ。」

マネージャーが配つていいく。

予定

一 明田

七時集合

七時半出発

バスで五時間かけて合宿

車内で昼御飯

一時から広いグラウンドで練習。

六時は晩御飯

七時は風呂

八時明田の予定確認

その後寝るまで自由時間

速水「（何も作者の合宿予定みたいにしなくても・・・）」

一四四

六時起床・集まり

七時朝御飯

七時半山登りに出発・弁当配布

十一時休憩・弁当

三時から同じよう。

三四四

六時起床・集まり

七時地元の中学校との練習試合・三校ほど戦つ。

十一時休憩・昼御飯

一時から練習

六時以降は同じ。

四四五

六時起床・集まり・朝御飯

七時から海に出発

ビーチサッカーをする。

その他色々

その後は同じ

五日目

同じ

七時から練習

六時まで御飯をはさみ同じ

六日目

同じ

七時から練習試合

六時まで同じ日程

七日目

七時から六時まで休憩はさんで練習

八日目

七時から練習

一時に雷門に向けて出発

速水「最後らへんいい加減ですね・・・。」

浜野「海つて釣りできるーっ！ーーー！」

倉間「なんか微妙だな・・・。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2850v/>

---

イナズマイレブンGO もう1人のシード

2011年10月8日18時01分発行